

大熊由紀子教授 2015年 6月 25日
発信力・想像力を磨いて、医療を変える。福祉を変える
スウェーデン大使館、厚生労働省、内閣官房、そして。
国際医療福祉研究所 医療介護福祉研究フォーラム 理事長 中村秀一先生
藤原瑠美

これぞ国家公務員

“顧客”は国民。使命は改革。現場に足を運び実行する。プロとして自己を磨く。仕事を断らない。既存の方針を疑う。方向性を明示する。筋を通す。公私の峻別。依怙鬚眉をしない・・・等々。

中村秀一先生は90分の講義の最後に、「目指してきたこと」を、短い言葉で上記のようにまとめられた。先生はこの言葉のように働いてこられたのだと、私は納得できた。



一隅を照らす。

伝教大師最澄が、国にとって必要な人材を養成したいという思いで『山家学生式』の冒頭に書いた言葉である。

優秀な頭脳、体力、人間性を兼ね備えて、この世に生まれた人材が粛々とその役割を果たす。先生の「目指してきたこと」には古くから日本にあった考え方にも通じるものがあった。

不遜でもなく、謙りもなく淡々と国家公務員として働いて来られたことが伝わった。

今日はいつもと違う

私にとって中村先生はこれまで、なぞに包まれていた。

だが、今日の授業で「中村先生は、こんなに饒舌で、熱い思いが身体からほとばしる方だった」と“発見”した。授業の収穫は、この“発見”につきる。懇親会では、先生は本音を語り、ビールジョッキを気持ちよく空け、オープンマインドで過ごされていた。

国際医療福祉大学大学院での、中村先生の『医療政策概論』の授業の中味は実に充実していた。

だが、振り返れば、私には壁が立ち塞がるような、漠然とした物足りなさを感じていた。

厚かましい私は、授業の“放課後”の懇親会で、思わず、「先生の医療政策概論の授業は面白くなかったです」と発言をしてしまった。

老トルの凡庸な生徒である自分を棚にあげての発言であった。

出向という武者修行

厚生労働省老人福祉課の仕事に就かれたのは1973年である。65歳以上の人口が7%という高齢化社会が始まった頃だった。つまり、高齢化率が7%から25%という、日本の福祉行政の激動期に先生は国の手綱を取られたのである。

面白かったのは、若い時の他省や県への出向のくだけりであった。

中村先生は、環境庁の「公害」の対応任務に始まり、在スウェーデン日本国大使館の赴任、北海道庁への出向、という3つの武者修行をなさった。

横路孝弘北海道知事の時の北海道庁への出向は、領海をもつ日本の国際問題を体験する絶好の機会であったようだ。去年、北海道を船旅をした時、私は北方四島をまじかに見て、危機感をもった。

人材育成のために、厚生労働省がこの人事を意図的にしたようで、それは凄いことであると思った。中村先生ご自身も「保守政権もとの革新知事の時代の出向に関しては、一時間では足りないくらい話せる」とおっしゃっていた。

武者修行で中村先生は大いに鍛えられ、経験を積んだことであっただろう。日本をグローバルにつかんだ若き日の中村先生の姿こそ、今日の講義の最高の収穫であった。